

アタッチメントと Warmth の観点からみた 自閉スペクトラム症児と母親の相互交渉

前田 早紀

【背景・目的】

自閉スペクトラム症 (ASD) 児は、安定したアタッチメントを形成することが可能であることが示されている (Rutgers et al., 2004) が、ASD 児のアタッチメントについては特異性があるという指摘がある (Sigman et al., 1986)。しかし、ASD 児と TD 児の行動を直接比較して ASD 児のアタッチメント行動の特異性を示した研究は少ない。また、母子相互交渉におけるポジティブな側面を表す概念として Warmth がある。MacDonald (1992) は、進化論的・行動生態学的な観点から、ポジティブな情動に基づく Warmth と、ネガティブな情動に基づくアタッチメントを明確に区別すべきであること、Warmth による経験を繰り返すことで子どもの親密な関係性への欲求が高まることを主張した。ASD と Warmth の関連については、母親の Warmth が ASD 児・者の対人関係に影響を与えることが示されており (Midouhas et al., 2006) 、ASD 児の発達に母親の Warmth は重要な役割を果たしている可能性があるが、ASD 児・者と母親の相互交渉を Warmth の観点から分析した研究は少ない。

そこで、本研究は、アタッチメントと Warmth の観点から ASD 児と母親の相互交渉の特徴を明らかにすることを目的として行われた。しかし、現在、アタッチメントと Warmth の違いを考慮した行動指標はないため、まず、研究 1 では TD 児と母親の相互交渉場面での行動を観察し、アタッチメントと Warmth をそれぞれ反映すると考えられる行動指標の特定を行った。研究 2 では、研究 1 で特定した行動指標を基に ASD 児と TD 児の母親との相互交渉場面での行動を観察し、ASD 児とその母親の行動の特徴を分析した。さらに研究 3 では、PECS の訓練の前後 10 ヶ月間において ASD 児と母親の相互交渉場面における行動を縦断的に観察し、新たなコミュニケーション手段の獲得に伴い、ASD 児と母親のアタッチメントや Warmth に関連する行動がどのように変化していくのかを検討した。

【研究 1: 定型発達児と母親の相互交渉の特徴】

研究 1 の研究参加者は、研究プログラムへの参加に同意した未就学の TD 児とその母親 12 組であった。研究プログラムは、大学の実験室にて、1 組につき約 1 時間行われ、1 時間の参加児の様子をもとにアタッチメント Q 分類法 (Waters & Deane, 1985) を用いてアタッチメントの安定性得点を算出した。また、研究プログラム中の母子遊び場面 10 分間の映像記録を再生しながら、各行動カテゴリーについてサンプル間隔 5 秒の 1-0 サンプリング法 (Martin & Bateson, 2007) を用いて行動の有無を記録した。加えて、プログラム終了後、母親には Q 分類法で親の養育態度について測定する The Child-rearing Practices Report に回答してもらい、母親の配列結果と、Roberts (1989) が作成した Warmth の基準配列との相関係数を、母親の Warmth 得点とした。

研究 1 の分析の結果、子どものアタッチメントと母親の Warmth には有意な相関がなく、アタッチメントと Warmth が独立した概念であることを示す結果が得られた。また、母子の各行動の生起率を用いた因子分析の結果、子どもの行動については「言葉での楽しさの共有」「近距離での関わり」「遠距離での関わり」「援助の要求」4 つの因子が算出され、子どものアタッチメントと子どもの「遠距離での関わり」因子、母親の Warmth と子どもの「言葉での楽しさの共有」因子の間に関連があることがわかった。母親の行動については「遊びの提案」「情動的な関わり」「積極

的援助」の3つの因子が算出され、子どものアタッチメントと母親の「遊びの提案」因子、母親の Warmth と母親の「情動的な関わり」因子の間に関連があることがわかった。

【研究2:定型発達児・自閉スペクトラム症児とその母親の母子相互交渉場面における行動の比較】

研究2の研究参加者は、研究プログラムに参加したTD児とその母親12組(研究1と同様)と、大学での個別療育に参加した知的障害を伴うASD児とその母親8組であった。TD児の研究プログラムの手続きは研究1と同様であり、ASD児の参加した個別療育は大学の実験室にて、1組につき約50分間であった。TD群・ASD群両方について、母子遊び場面9分間を分析対象とし、各行動カテゴリーについてサンプル間隔5秒の1-0サンプリング法(Martin & Bateson, 2007)を用いて行動の有無を記録した。研究2の分析の結果、ASD児はTD児に比べ、母親に対して、アイコンタクトや共同注意行動を行うことが少なく、一方で自分の要求をかなえるための接触が多いことが分かった。ASD児の母親は、TD児の母親に比べ、「遊びの提案」に関する行動の生起率に違いはなかったが、「積極的援助」因子の「援助」行動が多くなるという結果になり、ASD児がTD児よりも母親に働きかけることが少ないからといって、新しい活動を提案しての関わりが多くなることはないが、今の活動を持続させ、子どもが失敗しないよう援助することが増える可能性が示唆された。さらに、ASD児の母親は、「情動的な関わり」因子の「微笑む」行動がTD児の母親に比べ少ないことが示され、ASD児の母親は子どものASDの障害の影響により、Warmthに関する行動を表出しにくい状況に置かれていることが示唆された。

【研究3:自閉スペクトラム症児と母親の母子相互交渉場面における行動の変化】

研究3の研究参加者は、大学での個別療育に参加した知的障害を伴うASD児とその母親7組であった。研究参加者は、半年間の個別療育と療育終了から4ヶ月後のフォローアップ療育に参加した。個別療育では、絵カードの交換によって、機能的かつ自発的にコミュニケーションできるようにするPECSの訓練が行われた。PECSの訓練開始前である療育初回(Pre)、PECSのPhase3達成後である半年後の療育(Post)、療育終了から約4ヶ月後のフォローアップ療育(Follow)の3つの時期の母子遊び場面9分間を分析対象とし、各行動カテゴリーについてサンプル間隔5秒の1-0サンプリング法(Martin & Bateson, 2007)を用いて行動の有無を記録した。研究3の分析の結果、ASD児はPECSの訓練開始から10ヶ月の間に、PECSというコミュニケーション手段の獲得に伴い、要求の指さしを増やすことが明らかとなった。また、ASD児の母親については、10ヶ月の間に「情動的な関わり」因子の「微笑む」行動の表出が増えていくことが明らかとなり、ASD児のコミュニケーションスキルの獲得によって、ASD児の母親がよりWarmthに関連する行動を表出しやすくなる可能性が示された。

【総合考察】

ASD児はTD児に比べ母子相互交渉において、アイコンタクトや共同注意行動を行うことが少なく、ASD児の母親はTD児の母親に比べWarmthに関する行動を表出しにくいことが示された。しかし、ASD児がコミュニケーションスキルを獲得することによって、ASD児の母親がWarmthに関する行動を表出しやすくなることが明らかとなった。ASD児の母親はWarmthが低いわけではなく、子どものASDによるコミュニケーションの障害が母親のWarmthに関する行動の表出を抑制している可能性がある。また、アタッチメントと関係する母親が「子どもを見る」行動の増加も見られ、ASD児のコミュニケーションスキルの訓練を含め、ASD児の母親が子どもとのポジティブなやりとりを行えるよう支援していくことが、ASD児と母親のアタッチメントやWarmthの形成を促進する上で重要であると考えられる。(比較発達心理学)